

「奈良県の近代化遺産について」

—奈良県の取り組みと事例紹介—

井 上 主 税

1. はじめに

昨今、近代化遺産に関するニュースを耳にすることが増えている。『大辞林』には、近代化遺産とは、「重要文化財のうち、江戸末期から第二次大戦終了時まで、近代的な手法でつくられた建造物や工作物。産業・交通・土木遺産の三種がある。」と書かれている。

日本に所在する世界遺産をみると、2014年7月に登録された「富岡製糸場と絹産業遺産群」、2015年7月に登録された「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」はともに構成資産の多くが近代化遺産からなる。

前者は、貿易を通じ世界経済の一体化が進んだ19世紀後半から20世紀にかけて、高品質な生糸の大量生産に貢献した技術交流と技術革新を示す集合体として評価されている。後者は、西洋から非西洋への産業化の移転が成功したことを証言する産業遺産群で、その所在地は九州を中心とする。封建制度下の日本が欧米からの技術移転を模索し導入した技術を、国内の需要や伝統に適合するよう改良し、日本が短期間で世界有数の産業国家になった過程を物語る。

また、2016年7月に登録された「ル・コルビュジエの建築作品—近代建築運動への顕著な貢献—」の構成要素の一つである国立西洋美術館も、設計の決定が1955年とやや遅いが、近代建築の巨匠であるル・コルビュジエの建築的な特徴がよく表現されている点が評価された。

このように、数多くある文化遺産のなかで、最近では近代化遺産に対する関心が高まりつつあることが指摘できる。本稿では、奈良県の近代化遺産に関する調査・研究の現況を述べ、そのうちのいくつかの事例を紹介する。

2. 奈良県の近代化遺産

筆者が関西大学に着任するまで勤務していた奈良県立橿原考古学研究所の業務の一つである発掘調査では、先史時代から古代、中世にかけての遺跡を調査することが多く、幕末以降の近

代遺跡の調査はほとんど実施されていない。これは、奈良県が古墳時代の政権中枢にあり、また古代の宮都が営まれた場所であったことが大きな理由である。また奈良県に所在する世界遺産をみても、「古都奈良の文化財」、「法隆寺地域の仏教建造物」、「紀伊山地の霊場と参詣道」のように、奈良時代から平安時代の古代に該当する文化遺産から構成されている。

そのため、これまで奈良県の近代化遺産に関してはあまり知られてこなかったといえよう。しかし近年では、2011年度から2013年度までの3カ年で、近代化遺産総合調査（建造物）が実施され、近代化遺産を対象とした研究にも着手されている。ここでは、その成果報告書¹⁾をもとに、奈良県の近代化遺産の特徴を述べ、いくつかの事例を紹介したい。

まず成果報告書では、近代化遺産に関して、幕末から第二次世界大戦終了までを対象とし、基礎調査をおこない、産業1～3次、交通、官公舎、学校、生活関連、文化福祉、住宅、宗教、治山治水、その他に分類している。その上で、奈良県の近代化に関する総論および各論で、建築・産業・交通・土木に関する近代化遺産の特徴がまとめられている。なかでも、奈良県南部は京阪神への木材供給のため、鉄道や道路の敷設がおこなわれ、それにともない各方面で近代化が進展したとある。南部の山間部において、周知の遺跡が少ないのとは対照的に、近代化遺産が豊富な点は注目される。

事例紹介として、まず「奈良少年刑務所」のニュースが記憶に新しいところである。奈良少年刑務所（写真1）は、明治政府が1908年（明治41）に建設した煉瓦造の旧奈良監獄である。明治時代の「五大監獄」（千葉、金沢、奈良、長崎、鹿児島）のうち、完存するのはこの奈良だけである。明治政府は、竣工直後の1910年（明治43）の日英博覧会に模型を出展し、監獄施設の近代化を西欧社会にアピールしたという。2017年2月には日本の近代化の一側面を示す貴

重要な文化遺産として、重要文化財（建造物）に指定された。刑務所は同年3月末に閉庁されたが、今後の保存活用方法として、収容棟をホテルに転用し、刑務所の歴史を伝える「史料館」の開館が予定されている。

発掘調査で確認された近代化遺産の事例としては、明治時代の煉瓦積転車台があげられる。JR奈良駅連続立体化事業にともなう奈良駅構内の発掘調査（2005年度）²⁾において、蒸気機関車などを方向転換するための転車台を良好な状態で検出した（写真2）。直径約14m、残存高72cm、基底部幅1.38mを測る円形で、回転軸装置等の施設は取り外されていたが、煉瓦積の土台部分は良好に残存していた。1890年（明治23）の奈良駅開業以降に造られ、1921年（大正10）には使用されなくなった可能性が高いとされる。明治期の転車台として、数少ない重要な事例であったが、残念ながら記録保存となった。

鉄道と関連して、筆者は以前桜井市脇本遺跡の発掘調査を担当したことがあった。この遺跡が発見されたそもそもの契機は、明治期に運営が始まった桜井～初瀬間の軽便鉄道が1938年に廃止され、その跡地が県道（現在の国道165号線）として整備されたことにあった。現在では軽便鉄道の痕跡はほとんど残っていないが、掘削工事にもなって遺物が出土した状況等が、松本俊吉氏らによって記録されている³⁾。

このほか、奈良県立橿原考古学研究所と附属博物館に隣接して、「旧橿原文庫」の建物が残っている。1940年（昭和15）に国体建国精神を研究する文献資料を収集するため、「橿原道場」（現在の橿原公苑）の一施設として設置された。木造で入母屋棧瓦葺である。現在、この建物は研究所が管理しており、出土品の保管場所として活用されている。また、研究所への通勤に日々利用していた近畿日本鉄道橿原線の橿原神宮前駅中央口駅舎（1940年）は、関西大学の簡文館（大学博物館）をはじめ多くの建物の設計を手がけた村野藤吾氏の手によるものである。伝統的な大和棟をモチーフとした大きな屋根が特徴といえる。

3. おわりに

古墳時代から古代にかけての文化遺産が豊富な奈良県ではあるが、今回紹介したように身近

なところにも近代化遺産が多く所在する。「奈良少年刑務所」をはじめ、これらの文化遺産は今後の活用が期待される場所である。その一方で、建物の多くは老朽化が進み耐震性等の問題から、活用のためには保存の方策を講じる必要があるのも現状である。いずれにせよ、まずは奈良県民をはじめ、多くの人々に近代化遺産に関心を持ってもらうことが重要といえる。

註

- 1 奈良県教育委員会2014『奈良県の近代化遺産—奈良県近代化遺産総合調査報告書—』
- 2 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館2006『大和を掘る24』
- 3 光石鳴己編2011『脇本遺跡Ⅰ』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第109冊

謝辞：法務省大臣官房秘書課広報室および奈良県立橿原考古学研究所から写真の提供を受けた。



写真1 奈良少年刑務所庁舎（法務省 HP より）



写真2 JR奈良駅構内遺跡の転車台（南より）

博物館運営委員 文学部准教授